

Title	韓愈に於ける人間存在への思惟の深化：張耒との交遊に関する詩文より見て
Sub Title	Han-yu(韓愈) 's speculation on human existence
Author	和田, 浩平(Wada, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.57, (1990. 3) ,p.90- 114
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00570001-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

韓愈に於ける人間存在への思惟の深化

——張署との交遊に関する詩文より見て——

和田 浩平

一

中唐の文豪韓愈（七六八—八二四）が、その朋友柳宗元とともに、所謂る古文復興運動の中で、領袖的地位にあることは周知のところであろう。古文の中でも、彼は議論体や叙事体の文章を得意としているが、同様に、韻文、特に死者を悲しみ悼む哀辞や祭文という文体にも新たな境地を開いている。

清の乾隆・嘉慶を代表する桐城派の古文作家、姚鼐は、先秦から清に至る模範的文章を集めた『古文辞類纂』の自序に於いて、古文を十三類に分ち、哀祭の類をその末尾に付し次の如くいう、「哀祭類なる者は、詩に頌・風有り、黄鳥・二子乗舟有り、皆な其の原おこりなり。楚人の辞至りて工みにして、後世は惟ただ退之・介甫のみ而已。」と。これによれば、詩経に生じ、楚辭に技巧的に発展した哀祭の文学は、後世、韓愈と宋の王安石のみが、それを代表するという。

実際、『古文辞類纂』（卷七十二、七十三）を見ると、唐宋以降の古文作家では、韓愈（作品数十一）と王安石（作品数十）の作品が大半を占め、敢て挙げるならば、宋の歐陽修（作品数五）がこれに次ぐかたちになっている。このよう

に、姚籍の評価は、韓、王の二者を先秦以後見るべき文章のなかつた哀祭の分野の傑出したものと考え、復興者としての地位を与えているのである。

本稿で関心を寄せ、論述の柱として用いる「祭河南張員外文」も姚籍の所収に与る一篇であるが、この文に付された諸家集評の中の劉大樞の評に「祭文は退之の独擅、介甫も亦た其の似を得たり、欧公は則ち平なるを免れず矣。退之の祭文張員外を以て第一とし、李使君之に次ぐ」とあり、祭文については、師弟の間で、同一の見解があつたとわかるであらう。また、この評によれば、「祭河南張員外文」は、韓愈の二十五篇あまりの祭文の中でも第一と目されていて興味深い。ちなみに、第二と目された「李使君」とは、「祭郴州李使君文」のことである。

これに先んじて、明の茅坤は、これもまた作文の模範集として名高い『唐宋八大家文鈔』を編纂しているが、「祭河南張員外文」は卷十六に収められている。その後、余人の手を経て改編を見、清の沈德潛に至って成立し、我が国でも江戸・明治期に和刻本などによって紹介されつづけた『唐宋八家文読本』に於いても、この祭文は、卷六に収められている。してみると、「祭河南張員外文」は、古文作家たちから、名文としての高い評価を与えられ、文集の流布とともに人々に親しまれつづけていった作品であると思ふことができよう。

この祭文は韓愈より十歳ほど年長で元和十二年に卒した彼の一交遊者張署（七五八―八一七）という人物に対して書かれたものである。張署の名は、韓愈と懇ろな交遊をもち、詩人としても著名な、例えば、孟郊、張籍といった人々と比較されると、いささか影が薄い。韓愈の生涯が紹介される場合でも、陽山（広東省）への左遷時代（都を離れていた期間と考えれば、すなわち、貞元十九年冬より元和元年六月に至るまでのおよそ二年半のこと）に於けるさほど目だたぬ人物として、その名を瞥見できるぐらいなのである。波瀾、起伏を繰り返し、榮達の道を御していった韓愈の生涯よ

り俯瞰すれば、この若き日の挫折は、些細なかすり傷であり、張署も、所詮、注目されてもされなくてもよい間奏曲的な人物であるということなのであるうか。

張署がかように見られがちであるのは、韓愈との贈答の詩が存した事実が確認できても、そのほとんどが伝わっていない⁽¹⁾ということと、無関係ではないだろう。そのためか、既に、正史の韓愈傳(『旧唐書』卷一百六十、『新唐書』卷一百七十六)に於いても、彼の名を認めることはできない。だが、一方で、元の辛文房の『唐才子傳』に於ける韓愈傳の如く、張署のために附傳を末尾に付し、「時に功曹張署も亦た詩に工みなり。公と同じく御史と為る。又と同じく遷謫せらる。唱答集中に見ゆ⁽²⁾」と、簡略ではあるが、含みを以て、韓愈との交遊、詩才、を明示しているものもあるところを見ると、張署は、全く関心が寄せられぬ人物でもなかったとわかる。

後人の張署に対する評価はともかく、今、実際に、「祭河南張員外文」を読んでみるなら、それを補うに足るものを見出せるであろう。そして、少なくとも、韓愈本人からすれば、張署は、自己のアイデンティティを確認できる稀有な交遊者であったとわかるのであり、それゆえ、祭文も、その存在の大きさを認識した上で読まれるべきであると思われる。

祭文には、例によって、奇怪な表現が多用されている。その一方で執筆当時五十歳であった韓愈の気魄も十分に感じられて、重厚な趣きにつつまれている。無二の親友張署を祭るに、適ったものと言えるだろう。それでは、しばし、二人の交遊の軌跡を展望してみることしよう。

本稿の文章のテキストには、清の馬其昶の『韓昌黎文集校注』(世界書局、民国七十一年)を用いる。「祭河南張員外文」は、その第五卷に収められている。後出の旧注とは、明代に広く行われた東雅堂本『韓昌黎集』などに見える所謂

る南宋以来の注のことである。『韓昌黎文集校注』にもこの旧注は残され、新たに明清の各家の評説が「補注」というかたちで、付け加えられた。この「補注」の中には曾國藩の注も見られる。それは『經史百家雜鈔』（卷十六哀祭）に収める「韓愈祭河南張員外文」に付された注のことである。今、これを、祭文の段落分けのために用いた。各段の後に例えば「以上……」（1）などと挿入したものがそれである。

なお、祭文は長文であるために、本稿ではその書き下し文のみを載せることにした。その作成には、清水茂氏の『韓愈』（筑摩書房 一九八六）に負うところが大きい。

二

維_三れ年月日、彰義軍の行軍司馬・守太子の右庶子兼御史中丞韓愈、謹んで某乙を遣わして、庶羞清酌の奠を以て、亡友故河南県の令張十二員外の靈を祭る。貞元十九に、君、御史と為る。余、無能なるを以て、詔を同じゅうして並び侍り。君、徳は渾剛にして、標すること高くして己を掲ぐ。吾に如かざること有れば、唾すること猶お泥滓のごとし。余翹かにして狂れたり、年末だ三紀ならず。氣に乗じて人を加ぎ、挟むこと無うして自ら待めり。「以上同爲御史」……

：(1)
彼の婉變たる者、実に吾が曹を憚る。肩を側だてて耳を帖れて、舌の刀の如くなる有り。我は陽山に落ちて、以て麤狽に尹たり。君は臨武に飄る、山林の牢。歳弊し寒兇に、雪虐し風饑なり。馬下に顛って、我泗し君眺す。夜は南山に息うて、同じく一席に臥す。守隸防夫、頂に舐れ跣を交う。洞庭漫汗として、天に粘して壁無し。風濤相磨って、中に霹靂を作す。程を追うて盲進し、飄船、箭のごとくに激す。南のかた湘水を上る、屈氏の沈みし所なり。二妃行きて迷い

て、涙蹤、林を染む。山に哀しみ浦に思いて、鳥獸、音を叫ぶ。余唱え君和す、百篇、吟に在り。「以上同南遷」……(2)

君は県に止まって、我は又た南に踰ゆ。舩を把つて相飲む、後期有らんや無からんや。期して界上に宿して、一夕相語る。別れしより幾時か、遽かに寒暑を變ず。臂を枕にして歛つて眠り、余に加うるに股を以てす。僕来つて告げて言わく、虎、廐に入つて処る。敢えて驚かし逐うこと無うして、我が驥を以て去ると。君の云わく、是の物、乗るに駿ならず。虎取つて往きぬ、来寅其れ微あらん。我預め此に在つて、君と俱に膺けん。猛獸果して信あり、悪んぞ禱つて憑まん。「以上在陽山臨武時相約會於境上」……(3)

余は嶺中より出で、君は州下に蒞つ。偕に江陵に掾たり、余が望む者に非ず。郴の山奇変にして、其の水清く写ぐ。砂に泊り石に倚つて、還うこと有つて捨つること無し。衡陽に酒を放ままして、熊のごとくに咆え虎のごとくに嗥ゆ。令章を存せずして、罰籌、蝟毛のごとし。舟を湘流に委せて、往いて南嶽を觀る。雲壁潭潭として、穹林に擢んづる攸なり。風を大湖に避けて、七日鹿角においてす。大鮎を釣り登ぐ、怒れる頬は豕の狗ゆるがごとし。糲盤炙酒、群奴、啄に餘す。官に階下に走つて、首下り尻高し。馬より下つて塗に伏して、従事是に遭う。「以上同掾江陵、同遊南岳洞庭」……(4)

予は博士に徴さる、君は使を以て已む。京師に相見ゆる、願いの始めに過ぎたり。東生に分教せしときに、君は雍に掾として首たり。兩都相望む、別れに於いて何か有らん。手を解き面も背けて、遂に十一年なり。君出づれば我入る、相避くるが如く然り。生きて鬪り死して休む、呑んで復た宣はず。「以上自京別後、遂不復見」……(5)

刑官の属郎、章を引いて評奪す。権臣愛せずして、南康に是れ幹せり。条を明らかにし獄えを謹む、氓獍、戸に歌

う。用つて豊浦に遷されて、人の為に瘞を受く。還つて東都に家す、起つて河南に令たり。屈して後生を拝す、憤りの堪えざる所なり。屢しば正を以て免ず、身伸び事羈し。竟に死して昇らず。孰れか善を為すことを勧めん。「以上張之末路、潦倒而死」……(6)

丞相南討す、余、司馬を辱のうす。兵を大梁に議して、走つて洛下を出づ。哭して棺に憑らず、奠り畢を親からせず。其の子を撫でず、葬むるに野に送らず。君を望んで懐いを傷ましめ、隕つること瀉ぐが如き有り。君が績を銘して、石を壤中に納る。爰に祖考に及ぶまで、徳と事功とを紀す。外、後世に著わして、鬼神とに通せん。君其れ奚ぞ憾みん、余を衷に鑒みざらんや。「以上敘哀」……(7)

嗚呼、哀しいかな、尚わくは饗けよ。

以上がこの祭文の全てである。『經史百家雜鈔』でこの祭文に施されている曾國藩の注は、同じく張署の死とともに書かれた「唐故河南令張君墓誌銘」(卷二十傳誌下)にも見え、このことから、曾國藩は、墓誌銘にも関心を寄せつつ、祭文に段落分けを施したとわかる。そのためであろうか彼の区切り方は、実に当を得ていると私は思う。

祭文は、読後、ともすると、左遷期に於ける韓愈と張署との連綿たる交遊のみが注視されるであろう。というのは、貞元十九年の冬監察御史だった二人が御史台より左遷されて以後、南山、洞庭湖、湘水を経て、陽山、臨武(湖南省)にそれぞれ辿着くまでの道程の様子、左遷先に於いて、約束して泉境で宿泊したときの様子、召還されるに至り、帰旅、郴州を経て湘水を下り、衡陽、衡山、洞庭湖で遊覧を重ね江陵に到着するまでの様子等々が、具体的にそれぞれの地でのエピソードを交えつつ、事細かに描かれており、読者は、この期の二人の親密さが強く印象に残るからである。

三島中洲が、この祭文に段落分けを施したもの（『唐宋八家文読本』富山房「漢文大系」三）などは、左遷期が特に意識されている。ここに、三島の段落分けのすべてを示してみよう。

「維れ年月日」より「挾むこと無うして自ら恃めり。」に至るまで 〔第一段、絞剛直。〕

「彼の婉變たる者」より「呑んで復た宣べず。」に至るまで 〔第二段、絞艱難。〕

「刑官の属郎」より「隕つること瀉ぐが如き有り。」に至るまで 〔第三段、悲其憤死。〕

「君が績を銘して」より「尚わくは饗けよ。」に至るまで 〔第四段、言徳功慰憾。〕

この区切り方は、四つの段の中でも、第二段に重きを置いたものである。この第二段の内容と言えば、長安から南方の左遷地に赴くまでの一連の交遊、一夜の鼎境に於ける語らい、大赦に遭った後の北上時に重ねた遊覧、江陵に於ける二人の仕事ぶり、遅れた都での再会、擦れ違いの官途、十一年後の張署の死、というように、左遷時代の交遊も、その後の展開も、全てがこの中に収められる。この内容は、ちなみに曾國藩の区分にしたがうと、(2)の段から(5)の段までがこれに相当してしまふ。

また、「祭河南張員外文」の題下の主意には、「言_下口與_レ張共以_二剛直_一同艱難。」とあるところを見ると、左遷という艱難がいよいよ強く意識されて、段落分けが施されているとわかる。

確かにこの祭文は、かような左遷時代重視の読まれ方をされるとしても、主旨からはずれることにはならないし、もつともなことかもしれない。しかし、それだけでは作品の鑑賞という点でいささか狹隘な読まれ方と言わねばなるまい。

その点、曾國藩の区分の仕方と各段の要約は、巧みである。長安再会後の二人の交遊の行方を明確に示している。す

なわち、「以上自京別後、遂不復見」……(5)といい、加えて、「以上張之末路、潦倒而死」……(6)という。この二つの段の設定によって、祭文は、長安に於ける別離後の交遊が、それまでとは対照的に意外な展開に及んだこと、のみならず、張署の悲運の末路までもが意識されて読まれているとわかる。祭文は、左遷期のみが注視される読まれ方に比べて、幅のある作品として鑑賞に耐えているのである。

実際、「祭河南張員外文」とこの祭文を補足する関係にある「唐故河南令張君墓誌銘」のそれぞれの本文、及び、双方に付された旧注をたよりに、この二つの段落で叙べられた韓愈と張署との事状を整理してみた場合、前段は、祭文に「君出づれば我入る、相避くるが如く然り」とあるように相会うことを切望する二人にとっては、皮肉さながらの擦れ違いの交遊に至ることとして、とらえられ、また、後段は、中央に於いて国家中堅の職務をしたたかに歴任する韓愈とは対照的に、地方官に甘んじることの多い張署の不遇な末路として、とらえられるのである。それゆえ、曾國藩の要約は、簡略ではあるが相応しく、祭文の鑑賞に対しても、示唆するところが大きいと言えよう。曾國藩には、この祭文の中に、一人の人間の一生が複眼的に、そして、豊かに描かれているという見方があったのではなからうか。さればこそ、こうした適切な段落分けと要約がなされたと思われる。

ところで、この祭文は、長安に於ける張署との別離後、十一年を経て書かれたものであるという。十一年といえ、二人の心の冷却が十分に推測できる歲月である。この間、韓愈は、職務がかなり転々とし、その環境も人間関係も変化し複雑になっていった。嘗ての一交遊者である張署との距離も、一応遠のいたと考えなくてはなるまい。その場合、張署の死に当面して祭文が書かれたとしても、作品は、冷静な筆の運びによって、案外、装飾を凝らした技巧的なものからは離れ、単調なものとなるかもしれない。

しかし、こうした心の隔たりを補う事実もあるのである。それは、十一年の間に、張署にとって最後の職務となった河南県の令を、元和五年にいちばやく韓愈は経験して、馴染みがあるということ、また、韓愈は祭文執筆当時、御史台に於いて御史中丞の職をも兼任しており、嘗ての監察御史より左遷された事件を想起する場合にも、特別な感慨を抱き易い境遇に身を置いていたということである。更に、「唐故河南令張君墓誌銘」には、「愈、前に君と与に御史と爲つて讒を被り、俱に南方に県令と爲る者なり。最も君を知れりと爲す」と叙述があり、韓愈は張署の最もよき理解者であったとわかるが、そのような韓愈が、張署が亡くなったとき、淮西の乱を鎮圧するために地方にいて、葬儀に赴けなかつたというから、祭文は、ことさらに遺憾の念を強く抱いて書かれていたということも挙げられよう。これらの点をふまえると、渺茫たる十一年の歳月が流れていたとはいへ、祭文の執筆当時には、むしろ、死者張署への韓愈個人の何らかの技巧的な気配りがなされたとも考えられるのである。それは、ひょっとすると、曾國藩の段落分けと要約に示唆される如く、一人の人間の一生が復眼的で豊かに描かれるようにと巧みに表わしたことなのかもしれない。だが、どのようなものとなるうとも、ここでは、張署の一生が平坦に描かれるのを免れて、奥行きをもつものとして描かれることだろう。この祭文が名文と称される所以は、この辺りにも見出せないだろうか。そして、張署の人生と彼との交遊の事跡が、少なくとも祭文執筆時より遠望されるかたちで捉えられたら、いまま少し韓愈の心中に迫ることができ、偏った読まれ方をされることもないと思われる。

私見によれば、韓愈には、左遷時代の張署との纏縷たる交遊を通して、人の一生、或いは、人の運命というものへの関心が示され、それに対する思惟も深まりを見せている。それは、言い換えれば、一人の人間の存在そのものへの深まった思惟を得たということであろう。それゆえ、「祭河南張員外文」が読まれる場合でも、この事実は無視できないと

私は考えている。思惟の如何は、張署との交遊に関する詩に示されているが、今、そのいくつかを読みながら考察を加え、鑑賞の点で多分に余地を残すこの祭文への理解のために、私なりに一つの視点を提示してみたい。

三

さて、張署との交遊に関する詩は、十四首ほど知られている。本稿では、その全てを挙げるつもりはないが、「祭海南張員外文」の理解への一助として、先ず、「寒食日出游夜歸、張十一院長、見示病中憶花九篇、因此投贈」〔寒食の日出でて遊び夜歸る、張十一院長、病中花を憶うの九篇を示さる、此れに因んで投贈す。〕（詩に関するテキストには、錢仲聯の『韓昌黎詩繫年集釋』、上海古籍出版社、一九八四、を用いた。この詩は、その巻四に収められている。）という詩を読みたい。詩は、元和元年、韓愈が陽山より江陵へ量移されたときに作られたもので、三十九歳の彼はこの地で法曹參軍という属官の地位にあった。奇くも、張署も臨武より量移されて、この地で功曹參軍の職を得ている。春を迎えていた韓愈は、張署を花見に誘う。しかし、あいにく、張署は病氣であった。詩は、長編の七言古詩で、次のような書き出しで始まっている。

李花初發君始病 李花初めて発して君始めて病む、

我往看君花轉盛 我往いて君を看るとき花転た盛なり。

走馬城西惆悵歸 馬を城西に走らし惆悵して歸る、

不忍千株雪相映 忍びず千株雪相映するに。

花見を二人で行くのを長らく待ち望んでいたかと思えるうたい始めである。病氣の張署とは対照的な春の生吹。一人

での花見を余儀なくされ、さすがの韓愈も「惆悵」と落胆し、「不忍」と残念でしかたがない。

邇來又見桃與梨 邇來又た見る 桃と梨と、

交開紅白如爭競 交^{かわるがわ}る紅白を開いて 争い競うが如し。

可憐物色阻攜手 憐むべし 物色手を携うるを阻み、

空展霜縑吟九詠 空しく霜^{そうけん}縑を展べて 九詠を吟ず。

その後、春は、桃花と梨花とが美しく競演する候となる。それでも、張署はまだ快癒せず、二人そろっての花見は、
までも見送りとなった。張署が霜縑（白絹）に書いて寄せてくれた「憶花九篇」の詩を吟ずるのみという。

紛紛落盡泥與塵 紛紛落ち尽す泥と塵と、

不共新粧比端正 新粧を共にして 端正を比せず。

桐華最晚今已繇 桐華最も晚けれども 今已に繁し、

君不強起時難更 君強^たいて起^たたずんば 時更^{あたら}め難し。

關山遠別固其理 關山遠く別るるは 固より其の理、

寸步難見始知命 寸歩見難く 始めて命を知る。

既に李花と桃梨の花見を逸しているが、最も遅く花を咲かせるという桐の時期に至っても、張署は治らない。「君不強起時難更」の句には、今春の花見に敢て拘泥する韓愈の心情がよく表われている。だが、それは、所詮、かなわぬ願いであった。「関山」とは、この場合、嘗て、左遷先の陽山と臨武とに於いて、再会を切に望みあった二人の間に立ち
はだかっていた山嶺が想起されよう。この時の交遊の様子は、祭文の曾国藩の区分によれば「以上在陽山臨武時相約會

於境上」……(3)に見える。また、山嶺が険しく、通行に困難であったことは、同じく江陵で作られた詩、「憶昨行、和張十一」(「憶昨行、張十一に和す」(巻四))に、「陽山鳥路出臨武、驛馬拒地驅頻墮」(「陽山の鳥路 臨武に出で、馱馬地を拒んで駆って頻りに墮る」)の二句があり、馬も行くことを拒むほどのけもの道であったと形容されている。その関山によって、遠く隔てられ、離れ離れになっているのなら会えないというのも道理であるが、今、江陵に於いては、寸歩ほどのところに張署が居りながら、顔を見ることができず、始めて命を知るといふ。張署の病気が、二人の間に横たわる何よりも越え難い大きな障害となっているのである。身近なところに張署がいるために、嘗て左遷先で再会を果たしたときの困難さに比べれば……という名状しがたい無念が韓愈の心にはあったことだろう。と同時に、ここには、「始知命」という一種の悟りとも言える慎重な句がもたらされているために、個人的な利害を越える心情の表白をも読みとれるのである。「關山遠別固其理」の句には、一方で、張署という人物の存在への陽山以来の探究があったことが、示唆されている。それゆえ、私はこの段の終わりの二句に人間存在に対して深まった韓愈の思惟を感じるのである。

同じく南方に左遷され、そこでも艱難を磨して交遊を維持し、ともに左遷路を再び辿って北に向い、江陵に於いても下級の官吏を同じく務める。こうした一連の過程を通して、境遇を同じくする張署の存在それ自体が、既に韓愈の思惟の形成に、少なからぬ意味があったこととしても、一向に、さわりがないであろう。すなわち、自己の分身とも言える張署の姿を通して、自分の過去現在そして将来を見つめ、また、描く韓愈を想像するのである。そして、やがて自己を客観的に見据えた上で、自分の境遇を冷静に把握できるようになる。そうした精神的に豊かになった韓愈の姿を見てとれるのではなからうか。であればこそ、かような自己の利害の彼岸に立って人間の運命を悟る句の表白が見られると思う。

ちなみに、花房英樹氏の『韓愈歌詩索引』で「命」の語を引いてみた場合、この詩にのみ「知命」の語句が使われて

いることがわかるが、江陵に於けるかような心情の表白の特殊性もあらためて感じざるを得ない。詩は、次いで左遷の回想に及ぶ。

憶昔與君同貶官 憶う昔 君と同じく官を貶せられ、

夜渡洞庭看斗柄 夜洞庭を渡って 斗柄を看る。

豈料生還得一處 豈に料らんや 生きて還り一処を得んとは、

引袖拭淚悲且慶 袖を引き 涙を拭うて 悲しんで且つ慶ぶ。

各言生死兩追隨 各々言う 生死両ながら追隨せんと、

直置心親無貌敬 直置 心親にして貌敬無し。

艱難な左遷を象徴するかのような洞庭湖に於ける渡航の場面。人生航路を摸索するために斗柄を看て、夜航をする二人。ここには、生をないがしろにする姿は見られない。大海に浮遊しながらも、必死に自然に挑む姿があるのだ。試験を乗り越えた二人には、やがて、江陵への量移が訪れる。思いもよらぬ生還に悲喜こもごもの気持ち錯綜し、二人は誓うのであった、生きるのも死ぬのも一処でありたい、と。韓愈と張署とは、真に心が通い合う同志であったのである。かくして、この回想の部分には、韓愈の心の中に深く浸透している張署の存在が語られているのであって、あたかも張署の存在自体が、左遷時代に於いて将来の見通しがきかず身も心も彷徨を余儀なくされる韓愈の斗柄であるかのようだ。この点を考慮に入れるならば、先に、春の花見に拘泥する韓愈の姿が見られたのも、都落ちという精神的に冬の時代を体験してきた者にだけに理解でき、また、それゆえに鑑賞に値するだけの春がこの時にあり、それを二人で心底から満喫することを切に望んでいたからであると理解してよいであろう。

詩は、この後、更に続き、張署が再び南方の官吏に署せられた事実を語る。有能な張署が不遇の官途を再び辿るのは、時の為政者の見る目の無さであるとし、同じく江陵に於いて、下級官吏に甘んじている韓愈自身の境遇に対する不満を吐露する。そして、どうにもならない現在の不徳の我が身を省みて、いつしか、詩は、明宵には張署と是非醉郷に入りたいと望んで結ばれていく。

さて、以上、詩を読んで特筆すべきことは次の二点である。

第一点は、左遷期の交遊者張署の存在に対する探究の積み重ねとその成果を感じさせる人の運命への深まった思惟が見られるようになっていくこと。

第二点は、張署は、韓愈の心に深く浸透し、いわば、韓愈の精神的な支柱であったこと。

このうち、後者の特色については、張署との交遊に関する詩の多くに、表現の相異があるにせよ、それを見出せると思われる。しかし、前者の特色の場合、「寸歩難見始知命」のように、人の運命への覚醒と人間の存在そのものへの思惟の充実とを同時に感じさせる明確な句を有する詩は見出し難い。ただ敢て挙げるならば、「洞庭湖阻風、贈張十一署」〔洞庭湖にして風に阻まれ、張十一署に贈る〕(卷三)という五言古詩であろう。この詩は、帰旅、江陵へ赴く途中で作られたものとされる。

天候悪しき十月の洞庭湖に、張署とともに、舟をならべてつなぎ、風待ちをしていたときの心境を読んだ詩である。その中に、次の四句が見える。

相去不容歩　相去ること歩を容れず、

險如礙山丘　險なること山丘に礙へだてらるるが如し。

清談可以飽

清談以て飽くべし、

夢想接無由

夢に想わんに接するに由無し。

一步とてへだてぬところに居りながら、波が高いために、さながら険しい山によって近づくのをさえぎられているようだ。君と静かに話ができたらせめて心が満たされようが、こう波が高くては、夢の中でさえ接することができない。

韓愈は、この場に於いて、自然の大きな力と、それとは対照的な人間のあらい難い無力とを感じ茫然としているのである。この詩の場合、接しようとする二人を引き離す障害となっているのは、大波である。張署の病気が二人の交遊のどうにもならぬ障害となっている「寒食日出游……」の詩と着想に於いて類似していると言えよう。

二つの詩にかような特色があるということは、江陵に至る過程に於いて韓愈の人間存在への思惟の充実があったことを意味するが、郴州で作られた次の二首とてそれを示す例外とは思えない。

例えば、「湘中酬張十一功曹」〔湘中にして張十一功曹に酬ゆ〕（卷三）という詩には、北行に当たって、湘水に二人で一葉の舟を泛べる姿がうたわれている。また、「郴口又贈、二首」〔郴口にして又贈る、二首〕（卷三）という詩の第一首でも、扁舟（小舟）を湘水の流れにまかせて帰旅を急ぐ二人の姿が見える。この二首に於いて小舟に張署と我が身を托する韓愈の姿などは、あたかも得体が知れない大きな力に翻弄される微小な存在でもあるかのようにあり、それゆえ、かような詩を作る韓愈の内に、漂泊者としての意識の高揚があつて、何か人間の存在そのものへの問いが喚起されたと思われてならないのである。

この点をふまえて、江陵の詩の「關山遠別固其理、寸步難見始知命」という二句を再び顧みると、この二句は、江陵に至るまでに郴州や北行の途上で既にうかがわれた韓愈の本質的なものを問う姿勢に由るものと考えてもよさそうである。

ある。逆に言えば、郴州や途上で作成された詩は、江陵の詩の伏線なり下地としての意味をもつということであろう。

四

次に江陵よりやや遡って「八月十五夜贈張功曹」〔八月十五夜張功曹に贈る〕（卷三）という詩を読むことにする。この詩は、永貞元年（貞元二十一年）の八月、郴州で作られたものである。同年の正月には、徳宗が崩御し、次いで順宗が即位している。これを機に始まる王伾・王叔文らの一派、及びこれに与した柳宗元・劉禹錫らによる急進的な政治改革は、この八月の順宗退位とこれに代わる憲宗の即位とを以て、短命の中に終息し、参画者が流謫された事件は世に名高い。韓愈はかような中央のめまぐるしい趨勢を、地方において傍観する立場にあり、八月の時点では、張署とともにまだ郴州において、新しい身の処し方を待っていた。詩は、二十九句より成る七言古詩であり、中間部に張署の歌辞を借りるかたちをとり、その前後に韓愈の言葉を以てするという三部仕立ての構成をとっている。

織雲四卷天無河 織雲 四よもに巻いて 天に河無く

清風吹空月舒波 清風空を吹いて 月は波を舒ゆるぶ。

沙平水息聲影絶 沙は平らかに 水は息やんで 声影絶え、

一盃相屬君當歌 一盃相屬しよくす 君当に歌うべし。

君歌聲酸辭且苦 君が歌 声酸にして 辞且つ苦なり、

不能聽終淚如雨 聴き終る能わずして 涙雨の如し。

詩は、ひっそりと静まる月夜の叙景に始まる。本来ならば、寄辺ない韓愈の孤独と絶望が水辺しじまの静寂しじまに無限に広がる

ところであるが、張署という自己の分身がその場に対坐しているために、沈黙は破られ、彼の中に韓愈は、己の投影を見出すのであった。そして、杯をすすめ、一つ詩を作るようにと促す。かくして、でき上がった張署の詩の調べは痛ましく歌詞は哀しく、全てを聴かぬうちに涙を誘うという。その所以は、次の第七句から第二十三句までの張署の歌辭と稱するところに見える。

洞庭連天九疑高

洞庭 天に連なつて九疑高く、

蛟龍出沒猩猩號

蛟龍出沒して 猩猩せいじやう号ぶ。

十生九死到官所

十生九死 官所に到り、

幽居默默如藏逃

幽居默默として 藏逃するが如し。

下牀畏蛇食畏藥

牀を下れば蛇を畏れ 食には藥を畏れ、

海氣濕蟄熏腥臊

海氣濕蟄 熏じて腥臊。

このように張署の歌辭は、韓愈が思い出したくもない南方への旅立ちの句に始まる。次いで、奇怪な動物との遭遇による生命の危険、僻遠の地に流された罪人として感じる負い目、南方の特殊環境下に於ける用心に事欠かない日常生活、人間に対する不審、疑心暗鬼などが、句句別言されているが、ここに及んで、詩には苦渋と悲観的な色合いが強く滲み出ることになる。

昨者州前搥大鼓

昨きのうは 州前に大鼓を搥ち、

嗣皇繼聖登夔卓

嗣皇 聖を繼いで 夔卓あを登ぐ。

赦書一日行萬里

赦書 一日に万里を行き、

罪従大辟皆除死

罪大辟に従うも皆な死を除かる。

遷者追迴流者還

遷者は追廻し流者は還る、

滌瑕蕩垢朝清班

瑕を滌きい垢を蕩して朝に班を清くす。

州家甲名使家抑

州家は名を申べ使家は抑え、

坎軻祗得移荆蠻

坎軻かんか祗ただ荆蠻に移るを得たり。

判司卑官不堪説

判司は卑官にして説いうに堪えず、

未免捶楚塵埃間

未だ捶楚を免れず塵埃の間。

同時輩流多上道

同時の輩流多く道のちに上るも、

天路幽險難追攀

天路は幽險にして追攀し難し。

ここでは、憲宗即位による昨日の郴州に於ける何やら慌ただしい様子と、その後の動向が語られる。時代が推移し、古の堯舜の時代の夔や皋陶の如き賢臣が登用されるということで、張署の期待も膨んでいた。大赦状の発布により、極刑の身に在る者は死罪を免れ、左遷・流謫の身に在った者も、その汚名を返上し、清廉潔白な官吏として朝廷に返り咲く千載一遇の好機に巡り会わせたからである。だが、張署の場合、事はそう首尾よく運ばなかった。刺史がせっかくその名を上申してくれたものの、觀察使が逆にそれを抑えてしまい、都に直ちには戻れず、不遇にも、これもやはり蠻俗の地としか思えぬ江陵に於けるみじめな下級官吏、すなわち、功曹参軍としての生活が待っていたのである。それは、同年代の仲間達の歩む榮達の道からは、遙かに遅れをとる不満の残る量移であったという。

かくして、この段には、都へ召還されるのを心待ちにしていた張署の期待が裏切られ、その結果、ご託が昨日以来の

出来事となつて並び列ねられた観がある。苦渋と悲観とが付いてまわる不遇はまたしてもということであり、行く末に絶望的とも思える張署の姿が髣髴する。かような張署に対して、韓愈は、酒宴の有する独自の雰囲気を我が手中に弄ぶかのように、彼を慰める調子で歌辞を再び自分のものへと転じていく。

君歌且休聽我歌 君が歌 且しほちく休めて 我が歌を聴け、

我歌今與君殊科 我が歌 今君と科ことを殊ことにす。

一年明月今宵多 一年の明月 今宵多し、

人生由命非由他 人生命に由る 他に由るに非ず、

有酒不飲奈明何 酒有れども 飲まずんば 明を奈何せん。

詩は以上のように、張署の歌辞が極めて悲観的で絶望的な印象を与えるにもかかわらず、対照的に韓愈の歌辞は、「人生由命非由他」とそれを乗り越え、彼が人生と運命とを悟り、果ては、諦念に到ったかに見えるのが、この詩の妙と言えそうである。しかし、韓愈の心の内がそうでないことは、この詩が名月という詩作にとって絶好の機を得ていること、また、酒の力を借りていることを考えれば十分である。言うまでもなく、この詩作時の韓愈は、張署と同じような光景を目にし体験してきたが故に、張署が悲観と絶望に沈むのを見ても、それを我が身の問題として痛切に感じているものと考えられる。それゆえ、本来ならば、卒直な心情の表白も有り得るところであろう。だが、ここではそうはず、わざわざ三部仕立ての構成をとり、中ほどに張署の歌辞と称してそれを挿入したからには、ここに彼の意図があり、実は強調したいはずの自分の苦渋に満ちた露骨な心情の告白を、名月の酒宴という趣きのある場を生かしながら、張署に代弁してもらうかたちで巧妙に回避し、かえって、自分のいつわらざる心情を、この詩の読者に、婉曲的に暗示

裡の中に、了解してもらうためであると考えられる。そして、こうした心の在り方、言わば、心の鬱屈、或いは、くさくさした心の閉塞といったものは、容易には用いてはならないはずの「命」という語とは、どうも結びつかないが、これを敢て結びつけて「人生由命非由他」と喝破してしまった所にこの詩の面白さがあるのであり、韓愈のねらいもあつたのである。したがって、ここで「命」の語を持ち込んだ韓愈には、その使い方に配慮があつたと見てよいだろう。

先に読んだ「寒食日出游……」の詩には、「寸歩難見始知命」という句があり、「命」の語の使い方に慎重な韓愈が見られた。江陵で表白されたこの句を、長引いた張署の病氣故に漸くにして悟つた落ち着いた発言とすれば、郴州に於ける「人生由命非由他」の「命」は真意の程は伺い知れぬながら、その発言の場が巧みに設定されたやはり配慮をともなつたものとみなせる。そしてその発言の重要性は言うに及ばず、いずれも、他ならぬ張署との交遊の過程で作成された詩に見られる配慮であるだけに、その都度の場合に於ける張署の存在の役割が、自分の心情を托する詩を作成する上で、韓愈にいかに大きな意味があつたかということが言えるのである。それゆえ、交遊に關す詩一つ一つには、ここで読んだ「八月十五夜贈強功曹」の詩のように、張署という氣になる存在を通して見つめた韓愈自身の正体への認識はもちろん、人間一人の存在を自他ともに關心をもつて見つめる韓愈の充実していく思惟の経緯が自ずと托されていると考えなくてはならないと思われる。

ところで、「八月十五夜贈張功曹」の詩では、何故に「命」の語に自分の悟りの程を明確なたちで托すだけの心の在り方が生じなかつたのであろうか。これには韓愈を取り巻く背景について考える必要があると思われるが、中でも、陽山に於ける韓愈と郴州刺史李伯康との緊密な関係は無視できない。李伯康とは、張署の歌辭に「州家申名使家抑」という句があるように、召還に當り張署の名を上申した人物である。韓愈もこの李伯康と入魂であつたらしく、「李員外寄紙

筆」〔李員外紙筆を寄す〕（卷三）という詩と「祭郴州李使君文」〔韓昌黎文集校注〕第五卷〕とを書いている。とりわけ、この祭文には、韓愈が陽山滯在中に李伯康から受けた恩恵を中心に、交遊の委細が綴られている。また李伯康に関して、今、權徳輿にその墓誌銘（9）があつて、「十九年秋七月郴州刺史に拜せらる……中略……永貞元年十月某日甲子春秋六十三」という記述が見えることから、貞元十九年の冬に都を離れて南方に赴いた韓愈にやや先んじて、彼は郴州の刺史に着任していたとわかる。また、卒した年月とその年齢の記述から、刺史になつた後の彼の晩年は、韓愈が都を離れていた期間にちょうど内包されるものであつたともわかる。偶然とは言え、また、身分が異なるとは言つても、嶺南道連州の管轄下に置かれる陽山の県令の韓愈が、山嶺を越えた向う側にある江南道の郴州刺史と親密な関係にあり、交遊を展開していたのは、まことに興味深い。韓愈は、直接の上司であるはずの連州刺史に関しては詩文を残していないから、なおさらである。

ともあれ、こうした李伯康との交遊は、やはり、張署の存在があつてこそ、韓愈にとつて意味があつたのではなからうか、ただの郴州刺史ではなく、その管轄下に臨武県をも含み、かねてから韓愈の気を引く張署がその県令を任うという郴州の刺史であればこそ、李伯康は脚光を浴びるのである。かくして李伯康は、山嶺によつて隔てられた韓愈と張署とを結ぶ仲介者たる観を呈するが、韓愈がこの人脈をうまく活かし、張署との心の距離を縮める努力をしていたとするのは十分推測できることである。本稿では一章に於いて「祭河南張員外文」に付された劉大槐の「退之の祭文張員外を以て第一とし、李使君（10）之に次ぐ。」という評をとりあげたが、この評は、この李伯康を仲介者として築かれた韓愈と張署を結ぶ人脈があつた事実を目を向けるなら、左遷期、それも南方に於ける二人の交遊者を祭る文が一括して選択され、高い評価をされているということ、意味深長なものに感じられてくる。

韓愈は陽山に於いて痛切に孤独を感じ、道家の世界へ深く傾斜していったという見方があるが、そうした寂寞の中には、⁽¹⁰⁾しずむ韓愈を裏付けるかのように、陽山で作られた張署との交遊に関する詩「又魚」⁽¹¹⁾「魚を又す」(巻二)もあり、そこには独り魚刺しに興じる韓愈の姿が見える。この詩中の捕獲した魚を食する段には「膾成思我友、觀樂憶吾僚」(膾成って我が友を思い、觀樂しくして吾が僚を憶う。)という二句があり、ここでは、張署がその場に居合わせないために山嶺の向う側に思いを馳せる韓愈の心情が表白された。かような張署との再会を望む気持ちには、「祭河南張員外文」で見た通り、昇境に於ける宿泊という別なかたちで実を結んだらしいのであるが、いずれも陽山に於ける現在の境遇を、何とか打破したいと願う韓愈の偽わらざる心情が反映し、詩や祭文に於ける行為となったにちがいないのである。この点をふまえると、郴州に於ける人脈は韓愈の寂寞、焦燥を鎮める大きな鍵を握っていたことになるかと思われる。

また、張署の名が李伯康によって上申されるのを阻んだ使家、すなわち、湖南觀察使の存在も忘れてはならないだろう。なぜなら郴州に於ける人脈を大いに刺激したと考えられるからである。時の湖南觀察使は楊憑という人物であり、彼は、中央で政治改革に腐心する柳宗元に貞元十二年にいちばやく娘を嫁がせている。そのため、南方にあっても、その権力を笠に着ていたと考えられる。「送楊支使序」(『韓昌黎文集校注』第四卷)に見える部下の楊儀之なる人物を觀察支使として陽山に派遣していることなどは、この楊憑が韓愈に加えた圧力と考えてよいだろう。してみると、韓愈には都を離れていても相当の牽制があったものと推測されるが、こうした中央の動きに対抗する意味でも、李伯康との密なる交遊は疎かにはできなかったと考えられるのである。ここに至ると、郴州に於ける人脈は、韓愈の利害が微妙に絡んだ用意周到の人脈といった観を呈してくる。

簡単ではあるが、上述の如く韓愈を取り巻く背景、とくに郴州に於ける人脈について見ると、そこには、不自然で何

かぎくしゃくとした力の拮抗のようなものが感じられる。そして、私は、「八月十五夜贈張功曹」の詩にうかがわれた韓愈の心の在り方にも、やはり、これに似たものを感じるのである。それは、換言すれば恐らく韓愈の悲観に彩られた鬱屈であり、心の閉塞というふうなものであって、張署のそれと酷似したものであろう。さればこそ、韓愈は、かような心の在り方に気を配り、「命」の語を用いるのにも配慮をし、自分の命への悟りの程を明確に示さなかったのではなからうか。

五

詩に関する考察を、江陵より郴州・陽山へと時間を遡って加えてきたが、逆に、つまり、韓愈の左遷期に於ける歩みに従って詩を見ていくと、張署との交遊の過程に、人生、人の運命というものへの関心、探究がうかがわれるのである。それが、やがて、江陵に於ける人間存在への深い思惟となって表白されるに至ったと考えられる。「寒食日出遊……」の詩で刻印された「關山遠別固其理、寸步難見始知命」という二句こそ、そうしてもたらされた一連の思惟の経緯の最も深まったものと言えるのである。

そして、「祭河南張員外文」も、そうした深まった思惟によって表現された詩の延長にある文章として、読まれるべきではないかと私は考える。

祭文の叙述によれば、韓愈は、江陵に於ける張署との別離後、彼との再会を長安で果たした。しかし、以来、十一年間、交遊は、それまでの連綿たるものとは打って変わり、「君出づれば我入る、相避くるが如く然り」と、意外なかたちで展開したという。そして、そのまま遂に元和十二年の張署の死を迎えたという。

死者張署を祭るに際し、この時奇くも天命を知る五十の齡にあつた韓愈の胸中に去来したものは、いったい何であつたのだろうか。それは、恐らく、祭文の読者各人の想像によるしかないだろう。

しかし、それまでの思惟の深まりと、別離後の思いもよらぬ交遊の展開よりして、ここに新たに、人の一生、人の運命に対して、いっそう深く探究する韓愈が存したとするのは、推測に難くない。嘗て二人の交遊接触を阻んだものは、陽山に於ける険しい山嶺、洞庭湖に於ける大波、そして江陵に於ける張署の病氣であつた。その後、それは、擦れ違ふ官途となり、更には、永久に二人を引き裂く死となる。かような張署との皮肉な劇を見ているかのような交遊の回想のうち、痛切なる哀惜を以て、ここに、人間存在に対する嘗てない無比の不可解さを認め、自己の半生と運命をも回顧し擬視する韓愈の姿があつたとしても、不思議ではないのである。

〔注〕

- (1) 張署の詩としては、「贈韓退之」の一首のみが『全唐詩』卷三百十四に見える。
- (2) 布目潮風・中村喬共著『唐才子傳之研究』（汲古書院 一九七二年）の「一三〇」「韓愈」に依る。
- (3) 『經史百家雜鈔』では「以上在陽山臨武時兩人相約會於界上」と見える。
- (4) 『經史百家雜鈔』では「以上自在京別後遂不復見」と見える。
- (5) 原文は「南昌」。清水茂氏は、朱熹『考異』の按語によって「南康」に改めている。今、これにしたがう。
- (6) 詩の書き下し文は、久保天随の『韓退之詩集』上下（統国訳漢文大成）文学部）を主に参考にして作成した。
- (7) 原文は「休垂絶徼千行淚 共泛清湘一葉舟 今日嶺猿兼越鳥 可憐同聽不知愁」
- (8) 原文は「山作劍攢江寫鏡 扁舟斗轉疾於飛 迴領笑向張公子 終日思歸此日歸」
- (9) 『全唐文』（卷五百三）に収める「使持節郴州諸軍事權知郴州刺史賜緋魚袋李公墓誌銘」のこと。
- (10) 小野四平氏の「陽山における韓愈―〈送王秀才序〉・〈送区冊序〉ノートの―」主旨に基づく。

(11)

この詩題についてはテキストの注に「諸本『魚』下有『招張功曹』四字」とあり、錢仲聯は作成時をめぐる所説を紹介し、自らの「補釋」では「今考定為二十一年春在陽山作、庶無贅柄」と言う。本稿でもこの詩を陽山に於いて作られたものと考えた。